連載60 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（64歳・内科）

“この道はいつか来た道”末期がん（肝臓・肺）の自宅療養

「先生ありがとう」の一言は、すべての疲れが癒やされ、全身に心地よさが漂いました。

4年ほど前のある日、高度機能病院から、末期がんで余命7日以内という患者さん（大正5年生まれ・98歳・女性）を紹介されました。人生の最期は、自宅で迎えたいというご希望でした。

退院された日、患者さんのご自宅まで出向くことになりました。当院（松山市千舟町）を出発し、奥道後を右手に橋を渡ってしばらくすると、小さな集落があります。京都は鴨川の納涼床を思わせるような風情漂う食堂が見え、そばを流れる川の音を聞きながら、さらに奥まった道を進んで行くと、左手高台に一軒家が見えました。ご自宅は、当院からゆうに片道1時間はかかるところにあったのです。

5日間の短い期間ではありましたが、毎日、点滴静注補液や鎮痛処置そして在宅酸素を開始しました。看取るまでの2日間は夜間往診の依頼がありと、なかなか大変な日々でした。

そして最期のご報告をすると、ご家族の方がこうおっしゃいました。

「先生、遠いところまで来ていただいてありがとうございます。おかげさまで母は住み慣れた畳の上で最期を迎えることができ、幸せだったと思います」

それを聞いた私は、これまでの疲れが癒やされ、全身に心地よさが漂いました。そして帰る道すがら思いました。職員も大変ではあるけれど、依頼があれば、通うのに困難なご自宅での在宅医療も続けて行かなくてはと。

その時、ふと思い出したことがありました。平成10年ころですが、この患者さん宅より更に100mほど先にお住まいの在宅患者さん宅へ訪問医療に行っていたことを思い出しました。ですから、初診の日から“この道はいつか来た道”と感じていたのでしょう。

今回のような地域は無医村であることが少なくありません。それを在宅医療で補完しようとすることが国策でもあるのです。

しかしながら、現在の診療報酬体制では医療機関に大変な経済的不利益をもたらせてしまうことも事実です。患者さんのためにも、この問題を国は、急ぎ本音の議論で解決するべき時なのではないでしょうか。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/